発掘ニュース 33

樫原廃寺の調査

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

今回の調査区　北回廊と雨落溝・建物跡、奥に史跡公園が見える（北から）

はじめに　樫原廃寺は、京都洛西・桂川右岸にある長岡丘陵の東北端に位置し、三方が開けていて、はるか京都の街を見おろせます。そして古くからの道路と思われる山陰道と物集女街道が交差するところに建立されています。この寺の名称と発願者は不明ですが、樫原一帯は渡来系氏族の秦氏が支配していたので、一族にかかわる者ではないかと考えられます。

1967年に実施された市営住宅の建設にともなう発掘調査では、白鳳時代の八角形の瓦積基壇の塔をはじめ、南回廊・中門・築地などの主要伽藍の南半部にあたる遺構が発見されました。伽藍が中軸線上に並ぶ図のような配置は四天王寺式とよばれるものです。八角塔は一辺5.07m、現存高1.17mの基壇で、周囲には瓦を積んだ化粧がされていました。基壇の中央には塔を支える心柱の礎石が据えてありました。この時期には山背の国でも多くの寺院が建てられていますが、八角の塔の形式は全国的にも珍らしく、貴重な寺跡です。このことから1971年に国の史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されています。今回、最初の調査から30年を経た1997年に史跡公園の北側で発掘調査を行ない、多くの成果を得ることが出来ました。

今回発見した遺構　基壇　金堂にあたると思われる位置で検出した基壇は、予想以上に八角塔跡に接近していました。基壇の規模は東西幅13.20 m、南北幅10 m以上、高さ0.85 m残っており、非常に堅く突き固められていたことがわかりました。基壇は削平されていて礎石据付穴などの痕跡はありませんでしたが、周囲には溝状遺構や石列があったことを確認しました。また、基壇の周辺より出土した瓦は予想したよりも少ない数でした。

回廊・築地　溝や柱穴の組み合わせから北回廊・東築地と判断した遺構を検出し、コーナーと思われる地点では柱根が残存していました。溝は新旧2時期あり、古い方は基壇と同様に真北から少し西方向に振れていました。

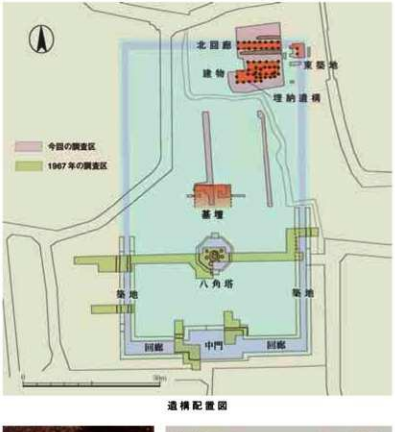
掘立柱建物　北回廊より南には数多くの柱穴があり、掘立柱建物3棟を重複した状態で検出しました。建物の用途は不明ですがいずれも奈良時代末から平安時代初頭に建てられた、梁行2間、桁行4～5間の東西建物です。

埋納遺構　いちばん南で検出した建物の南側柱列の中央柱近くでは宅鎮（家を護るための祭祀）と思われる遺構を検出しました。この遺構の底部に軒丸瓦・軒平瓦をサンドイッチのように重ね置いていました。ほかにも軒丸・軒平瓦が出土したまじない遺構とみられる奈良時代の土壙があります。

出土した遺物　白鳳時代から平安時代の丸・平瓦が大半で、軒丸・軒平瓦、鬼板のほか道具瓦も出土しています。多くの瓦に混じって丸瓦と平瓦を組み合わせたような形の瓦があります。この瓦は平面形が通常の瓦と大きく異なっており、八角形の塔の隅部に葺く特殊な道具瓦の可能性があります。その他には溝・土壙から奈良時代末から平安時代中期の土器が出土しています。土器類は土師器皿、須恵器蓋・杯・壺・鉢鉢、黒色土器椀、灰釉陶器小壺・浮瓶、白磁椀などがあります。二彩陶器も出土していますが、小さな破片でした。また、金属製品としては鉄製刀子・コの字形金具などがあります。

樫原廃寺の盛衰　樫原廃寺の創建は白鳳時代であると考えられます。主な遺構は八角塔・基壇・中門・回廊です。建立当初の遺構は全体が少し西に振れていることや、西から東に傾斜した地形の関係で、調査地の東半部で整地を施していた部分もあったことを確認しました。平安時代初頭には回廊は正方位に改修され、八角塔の基壇も一部補修を受けたようです。検出した遺構や遺物から、この寺院は平安時代中期に廃絶したことが明らかとなりました。

（久世　康博）



遺構配置図

埋納遺構

道具瓦